

3 わたしのいるところ

周囲の見取り図を描く

かぎりなく広がる、光と、空気と、ぬくもり——きらきらときらめきながら響きあう物質が、みずからの土台である大地を覆うようにして広がっている場所——に、わたしたちは住みかを定め、そこから出かけ、そこに戻る。わたしたちの住まいは、収集した道具一式を単に保管するための施設ではない。そこは親密さと静けさのための場所なのだ。⁽¹⁾わたしたちの家は職場や市場の喧騒と切り離されている。肘掛け椅子や、バルコニーの椅子といった家具は、わたしたちの身体という実体と混ざり合い、支えとなり、休息を与えてくれる。ハイファイやテレビは、日常の関心と一線画した娯楽で空間を満たす。植物、魚の泳ぐ水槽、裏庭は、そこに息づいている自然を「わたしたちの住まいに」招き入れる。

その州のあちこちに車を走らせていただけの頃、この町の景色は車窓を流れていく視覚的なパタ

ーンだった。しかし今、わたしたちはこの場所に住もうとしている。ホテルに部屋をとり、あるいは一軒家を借りる。そして、家のドアから職場へとつづくメインストリートを描き、食料雑貨店、クリーニング店、銀行、郵便局、映画館、バーに向かう横道を引く。進路を定め、目標を思い描き、道具を手に入れ、障害物にぶつかる。

使われている物とは、まずもって手に取られ、所有されている物である。それらの物はそれじたいで閉ざされている。⁽²⁾物は手段であると同時に目的でもある。物はわたしたちの渴望を満足させ、必要に応える。そして、わたしたちの感受性や官能を引きつける。物は、静けさと親密さの空間に付属するものであり、楽しみのために手元に置かれている。

わたしたちが実践的な意図や目的にもとづいて見取り図を描いたエリアは限られたものである。

大工や病棟を夜間巡回する看護師の作業領域は、道具的関係をかぎりなく世界中に広めることはない。⁽³⁾食料雑貨店、クリーニング店、工場、オフィス、病院といった職場は、わたしたちが実践的な意図のもとに囲った区域であるが、それは同時にくつろぎの場であり、喜びを分かちあうところである。わたしたちにとって、ここに住むということは、ここに住みかを得るということであり、この町を満喫し、海に隣接する森林や、棚田のある山々を、北部あるいは熱帯地方の空模様を享受することである。

わたしたちが用いる手順や道具、わたしたちが働く目的の先にあるのは、今この手のなかにあるものや、壊れてしまったもの、使い果たされたもの、その途上にあるもの、傍に置かれてしまった

ものの背景にとどまらない⁴。その彼方には、未知のなにか、手つかずのなにかがあるのだ。そこには大地が、光が、空気が、空が——表面のなかにとどまることのない元素が存在する。それは、かぎりなく遠く、そして深いところに広がっていく。

リズムミカルで旋律的な空間

生命体は物質からなる構成体で、そのなかを血液、栄養、エネルギーが、複数の概日リズムにしたがって循環している。感覚器官はその先端で振動する刺激を拾い、そうした刺激は、身体の生化学的な恒常性維持^{ホメオスタシス}の度合いによって多様である。生命体の敏感な表面は、運動を、ごろごろという低い音を、圧力を、感触を、震えを、痛みを、規則正しい動きを、脈をとまなう物質を記録する。

わたしたちは姿勢を変え、力を抜き、緊張し、ある姿勢をとってからまたほかの姿勢をとり、前進しては後退し、ものを避け、ものを操る。わたしたちは体を震わせ、揺すり、揺さぶり、振り、激しく上下に動かし、跳ね回り、身ぶりを使う。過剰なエネルギーのうねりが活性化し、高揚のなかでさらに強まると、今度は静かになる。わたしたちは外部の環境へと進み、活動し、家に帰る。特定のイニシアチブが普通のものになり、やがて習慣となる。わたしたちの身体のふるまいは、物理的刺激に対する反応とはいえないが、目的に応じて発動するイニシアチブの連続でもまたないのである。身体の動作にはリズムミカルで旋律的な構造がある。

わたしたちの呼吸のリズムは身体の規則に従いつつも、熱帯地方の低地の湿気を含んだ空気や、

高地の薄い空氣のピリピリとした風の勢いからも影響を受ける。心臟の鼓動は、興奮するような出来事や、おそろしい出来事に、夜は時計のチクタクいう音と同調している。概日リズムは、わたしたちの内臓を、昼夜のサイクルや、太陰月と季節のサイクルと調子を合わせる。歩くとき、わたしたちは自分の持つエネルギーの大きさや疲れ具合に応じた歩みとなるが、大腿で歩くにせよ、ゆっくり歩くにせよ、岩場や砂地のリズムや、海岸に打ち寄せる波のそれを刻む。わたしたちの歩みは、自分たちの隣にあるもののペースをとらえるのである。

神経心理学者のアレクサンドル・ロモノヴィッチ・ルリアのいう「動的メロディー」⁽⁶⁾、ジル・ドウルーズとフェリックス・ガタリのいう「リトルネロ」⁽⁷⁾は、わたしたちの本拠地^{ホームベース}を確立し、その周囲に利用可能な区域を拡張、その外の世界に行くための道筋を開く。

まだ動き回れず、ものを操ることもままならない幼児や、暗闇のなかで不安を感じた子どもが、鼻歌を歌って自分を落ち着かせる。その声は、空氣の運動や活気を運び、暗闇あるいは寄る辺のない空間に中心を生じさせる。子守唄は、赤ん坊のために安心して眠ることのできる場所を定める。ベッドカバー、あるいは机の上の書類がこすれるさらさらという音、ため息や咳払い、鼻歌や口笛といった音によって、子どもや大人は、こゝ現在を維持し、彼あるいは彼女の存在をここに維持しているのである。わたしたちは脚をぶらぶらとさせて座り、指先で髪をまさぐり、鼻歌を歌い、口笛を吹き、両手を大きく振りながら、異なる景色を歩いていく、

朝の儀式——沐浴、朝食、新聞——は、一日の手始めとしてわたしたちがあえて行う一連の所作

ではない。わたしたちの本拠地^{ホームベース}は、目をみはるような光景として、わたしたちの前に用意された装置ではない。むしろそれは、過ぎゆく部屋のリズムであり、それぞれの部屋には、独特の色調や色相、明度の強さがある。わたしたちの衣類、家具、台所の隅、ダイニングルーム、植物、窓、庭は、リズムカルなパターンを形成する。そうしたものの数々にわたしたちは反応する——ベッドを整え、皿を洗い、裏庭でのんびりと過ごすといった運動を反復することによって。わたしたちは、スタックカートのようにきらめく朝の光のなかを、あるいは通奏低音のような午後の薄暗い光のなかを動きまわる。

わたしたちは仕事に出る。植木にぐると囲まれた家々が見え隠れするのを尻目に自転車漕ぐ。そして、ラッシュアワーの歩道をかき分けるようにして前進する人びとの速度やリズムに加わる。職場の窓を開け、上着や昼食を置き、仕事道具をきちんと並べ、そうすることで働くための空間を区切る。オフィスで働く人びとが交わす仕事上の挨拶ややりとりは、木こりの叫び声や、ボルガ川の船乗りの歌う作業歌のように、わたしたちがどこかで従事している作業を機能させる。路上に立つ物売りは呼びこみで、スナックや衣類を売りさばく空間を区切る。ショッピングモールに流れるミュージックは、労働者が大量生産の商品をリズムに合わせて積み、売り子たちがそれを売る場所を都市のざわめきや騒音のさなかに確保する。

適切で効率的な動作は、わたしたちの身体のうちにある「筋肉にそなわる音感」⁽²⁾がその外に響き渡っている、もしくは無音の反復を聞き分けるところに生じる。そうした動作は、変化する日の光

や夜の暗闇、移り変わる四季のなかで、物の配置のもつパターンや循環に反応し、同僚や買い物客のリズム、空間の刻むペースやささやき声に合わせて動く。リズムや動的メロディーは、神経学者のオリヴァー・サックスが「活力と自由に満ちたわたし」と呼んだものの感覚を生じさせる。それはつまり、身体の内側の力が内部にある組織を維持しながら、栄養を循環させ、エネルギーを生みだし、余剰となったエネルギーを放出するという点で能動的であり、また、その認識や運動が外部の力の影響に対する単なる反応や、必要や欲求の切迫した状態に駆り立てられたものではないという点において自由である。⁽⁸⁾自分とは異なるペースでものごとを進めることを強いられると感じるとき、わたしたちは自分自身と切り離されたように感じる。

わたしたちは単純に明確な意図があるから出発するのではない。わたしたちは、遠くからこたまするリトルネロを聞いて、足を踏みだすのだ。ある女性がドアを開けて、だれかを呼ぶか中へ招き入れる。大股で歩き、さようならや「やあ、こんにちは」といった挨拶をしながら、前進する——腕を振り、腰を揺らしながら、早歩きし、手足を大きく振って歩き、ヒールをこつこつといわせ、街や丘にむかう近道や遠道を通ったりしながら。

わたしたちは昼の休憩時間にウィンドウショッピングをしてから引きかえす職場や、平原をのんびりと歩いてたどり着く山をペースの変化によって、認識している。オーストラリアのアボリジニは、景観のリズムやメロディを感じし、そうしたソングラインをたどって大陸を横断する。

彼方から響くメロディを耳にして、わたしたちは住まいをあとにし、二度と帰らないこともある。